

方向

第二二〇号 一九九〇年一〇月一〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人・大塚五朗 (一一) 1990.9.25 原田憲雄

歌作復活

一九三〇年 五郎、三十三歳。京都府立京都第三中学校教諭。京都府葛野郡太秦村安井に居住。松子、三十二歳。朗、十歳。喜子、六歳。樹、二歳。朗は前年、東京の小学校から京都の御室小学校第二学年に転入。

同僚に歌人や俳人がいて、五郎の短歌制作の意欲は復活する。歌集『山原』の「京都在住時代―その一―」はこの年の作品を収める。

志摩行

昭和（原文は和昭）五年一月同僚五人と伊勢参宮を兼ねて鳥羽に旅行す。

まづしかるくらしに居りてわが恋ふやその旅にして目覚めけるかも

家毎に列ね乾したる伊勢大根（おほね）つらつら寒き陽があたり居る

夕ちかき山の水田の薄氷さびしき月をうかべたるかも（二見にて四首）

藪（原文は藪）かげに風おちはてて夕寒し汽車待つ人の言葉すくなき

伊勢の国や鳥羽の港に越ゆる道水田つづきはみな凍りけり

かりかりと破るる水田の薄氷心すべなみ破りてたはむる

外の面吹く風の寒さを打ち寄りていふがさぶしも酒を汲みつつ（鳥羽の宿五首）

ほろほろと酔へばわりなし旅の夜の樋口功（ひぐちいさお）が歌のおもしろ

寒々と尿（いばり）はしつ天なるや片破月をわが見つるかな

旅に来てかすかに心澄むものかねがへり寒く目覚めたるかも

人にいふ寂しさならずしみじみと伊勢の竹笛吹きて遊ぶも

日竝べて降りし時雨の今朝はれてしみに寒し鳥羽の島山（日和山眺望三首）

吹く風はいまだ寒けど鳥羽の海島山かげは梅ほころびぬ

波の上に島山がおとす影青し鳥羽の港は朝はれにけり

伊賀の山に落つる夕陽の小ささよほのかに我は疲れたるかも（帰途）（山原 二〇二〇）

このときの「同僚五人」の一人は樋口功、あとの三人は山村湖四郎（やまむらこしろう）、岩見護（いわみまもる）、森永義一（もりながぎいち）だろうと察せられるが、いまひとりとは不明である。樋口功は前記『同窓会名簿』によれば一九二一年二月から三九年三月まで在職し、逝去と記す。一九七一年発行の『創立六十周年記念号』（京三中・山城高 双陵同窓会）が出てきたのを見ると、山村先生の「大正末期の旧京三中の思出」と題する文が載っていて、

樋口功先生のニックネームは「だるま」で生徒から親しまれた。芭蕉研究で一家をなしておられたが生徒に

はその造詣の深さは理解されなかった。

とあり、まったくその通りだった。第十七回卒業生で国語の教諭となった小寺政太郎先生の「わたしごと」にも、ああいう純粋な先生を、校長も認めず、生徒も悪ふざけのさかなにしていたことは、慚愧すべきだ。——晩年、といっても四十年いくつだろう、何を思い立たれたか、国民服？を一着に及んで、京の端山の山歩きを盛んにされた。袖珍本ともいうべき、絵入りの句集の手作りしたものをもらったことがある。「達磨忌やだるまのおれは火の車」といった句が、絵とともにあったことを覚えている。

という。わたしは夏休の補習授業で教えていただいただけだが、入学試験には関わりのなさそうな杜甫の詩の話をして、ひとりで感動しておられた姿が、目に焼き付いている。京大の選科で中国文学を学ばれたように聞いた。

竹 林

いづくまでつづける路ぞしらじらと二月の風の吹き通るなり

竝みたてる青竹藪（原文は藪）の昼深し天なるや陽の光澄みつつ

竹林にしみ透る陽の夕寒しわれはくさめをころしたるかも

（山原 一九二〇）

属 目 春 景

おのづから目は覚めぬつつ天揚る雲雀の声を聞くが愛（かな）しも

ねて聞けばつぶさに愛しきさらぎの雲雀は空に揚りたるらし

朝空の浅黄にかすむあはれさや雲雀の声は高くあがらず

小夜深く雨かもやみし前小田のひきは静かに鳴きいでにけり
鳴きいでて幾日かも経し前小田のひきの遠音はやや整ひし

深山にも春來たるらし水上ゆ木は伐り下す筏に組みて
山川の春はさびしき瀬とたちて筏は流すその荒き瀬を

弥生なす空の青さよほのぼのと白木蓮の花咲きにけり

木蓮の花の白きは寂しけれど空青々と晴れにけるかも

朝（あした）吹く風をすがしみたわたわに咲きてゆれるる木蓮の花

木蓮の盛りの花に風あれやはのかなるかもゆるる白花

たわたわに咲きて枝垂るる白花の小米桜は地にとどきけり

昼たけて鳴く鶏の声遠し小米桜の花はこぼれつ

暮れ残る空の明りのおぼつかな祇園桜は花咲きにけり

月読の月の下びの花桜ゆれて明るき浅夜なりけり

（山原 二二二）

「弥生なす」以下の四首は、『京都風土記』の「木蓮」という文章の中に引かれ、つづいて京都へ赴任の当日、初めて見る学校の玄関で見た白木蓮のことが記される。一連の歌は、作られたのはこの年にしても、前の年以來の京都から得た印象が、つまかさなり溶けあって、いまふきこぼれてきたのであろう。

先生の歌は作時を確かめにくいものがかなりあり、それはこのような作風にも関わるにちがいない。

無戒について

1930 6

柴野純孝

先日、新聞をのぞいていたら、青森県むつ市で、見世物の錦蛇が逃げ出し、人々が大騒ぎをした記事が出ていた。幸いその大蛇は近くの草むらで見つかり、元の所へ収まったので、まず目出度しという具合になった。それ以前にも同様な事件が何回かあったような気がするのであるが、第三者から見れば、当事者達のあわてふためく様子が興味の対象となるのであろう。

ところで「大蛇を野に放つ」というとすぐ連想されるのが『戦国策』の「市に虎あり」という言葉であり、さらにそれを破天荒な形で使った『末法灯明記』の文である。この書は古来伝最澄といわれてきたが、今日では平安末期のものとされるらしい。

ではこの作品において作者は何を言わんとしているのか。それは題名に掲げられた末法の灯明であろう。それではその灯明なるものは何であるか。作者はそれを、無戒の僧である、と大上段から断言しているのである。まさに革命的宣言ともいふべきであらう。親鸞もその主著『教行信証』に長々と引用しているので、そのさわりどころを今の言葉に直して述べてみよう。

今時はすでに末法無戒の時代に入っているのであるから、そこには僧尼の守るべき戒というものはあるはずがない。無いものを守ろうとすること自体が道理にはずれたことである云々。従って、たとい僧尼なる者がおったにしても、それは「名字の比丘比丘尼」すなわち名前だけの僧尼であって、子どもの手を引いて酒屋などに出入

りしている。まったく嘆かわしいことに見えるが、よくよく考えてみると必ずしもそうではない。かれらがおればこそ、この末法の世においても仏法は形だけでも、どうか保っているのである。してみるとかれらの存在価値は正法時代の仏弟子舍利弗（しゃりほつ）等に劣らないのである。無戒だからといってかれらを迫害すれば阿羅漢の血を流すと同様の大罪といわなければならぬ。そんな訳だから、この末法の時代にありもしない戒を建て前として守ろうとする者があるとすれば、大聖の教え、予言に背く大罪人であって、それこそ「市に虎あり」と言い触らす者であって、だれが信じようか。というのである。まったく驚天動地の文であるが、一考すれば、あながちそうでもない。視点の相違がそうさせるのである。

まず「末法」というものを考えてみたい。普通には、正法・像法の二時代が終り、その後に来る仏法の衰える時機を指している。元来この三時の教判は仏の予言と言われている。一般に末法が意識される時代は世相が混乱し、仏教が迫害される時代で、僧尼が墮落し、菩提心の衰えた時代である。故に発菩提心が何ものにもまして急務とされ、サンガ（僧伽・仏教教団）の在り方が問題とならざるをえないのである。当然、個々の僧尼の自覚、危機意識が、問題の核心となつてこよう。

これに対して『末法灯明記』の述べる末法とは、ちょうど大宇宙の法則のようなものを指し、天理、天道の顕現の一つと考えられていて、人間の実存、危機意識はまったく見られない。その天の理法に合致するように、自己の小賢しい計らいを捨て、無為自然に、本音のままに生きるのが末法時代の在り方である。故に戒・定・慧もなく、菩提心などありえない時代であるが、これも天理の顕現、その然らしむるところであるから、逆らつては

いけないことになるであろう。故に天道を無視して、ありもしない戒などを守ろうとすれば天の大法に背き、道理に暗いものと言わなければならない。このような道にはずれたものが、道理の現われである末法時代ということを寛らずして、敢て戒などを守ろうとすれば、天理に背き、その害は計り知れないであろう。それはまさしく市に現れた虎にもたとえられる。これが『末法灯明記』の末法観である。それはそれでいちおう筋が通っているように見えるが、しかしこれは、仏教本来の立場でないことは明らかである。

また名字の比丘を舍利弗等に比肩させる論法も同様である。即ち名字の比丘は天理の顕現したものであり、それ故この上もない尊い者、かれらがいかなる姿であろうと、かれらによって仏法が護持されていると言うべきである。だからかれらを迫害すれば、天理に反し仏法にも背く大罪を犯すことになるわけである。

これは明らかに道家の思想であり、道家と習合して発展する本覚門の考えが『末法灯明記』に伺われるのである。眼前の事象を本源的なものの顕現、否、そのものと見るのであり、ここに見られる論理はいわゆる「相即の論理」であって、後世の日本文化に大きな影響を与えたといわれている。

さて、親鸞がなぜその主著に『末法灯明記』をとりあげたのかを考えてみたい。

その一は、『末法灯明記』の作者の時代に対する態度姿勢に共鳴したのであって、末法を把握する理論をよしとしたのではないだろう、ということである。『末法灯明記』の作者は末法に対して、ひるむことなく真正面から堂々と対している。一刻一刻が絶対者天理の顕現であるから、ひるむことはないわけである。従って時代が末法に入っても嘆くことなく、それまでの建て前となっていた戒や、ひいては律令制を、完全に捨て去ることがで

きたのであろう。かれに言わすれば、旧時代の建て前であった戒や、律令制は、もはや存在価値はなく、敢てそれに依るものは偽善者となるのであろう。親鸞が注目したのはその決然たる姿勢であったのではなからうか。しかし末法観そのものは、『末法灯明記』は道家的であり、親鸞はあくまで仏徒であったと考えられる。

その二は、時機相応観と灯明観に注目したためであろう。『末法灯明記』では、末法の時代には無戒で菩提心というものはなく、衆生を照らし導く法も衰えているから、ただひとつ大法の現れである名字の比丘・比丘尼のみが世の灯明であると断言して、楽観的、現状認知的である。そこには極めて明瞭な時機相応観が現われている。古い建て前を捨て去るのに躊躇しない。これに対し、親鸞は、末法を、自己の問題として、主体的・実存的に受けとめ、末法の闇の中に光を求め続けたのである。

両者の灯明観には根本的な相違が存するのであるが、親鸞が他山の石として『末法灯明記』を見詰めたのは、その徹底した末法相応観であったと思われるのだが、どうであろうか。かれが暗中に求め止まなかった灯明はやがてかたから見える時代がやってくる。

戒については、親鸞は大乗空観による否定の論理の破戒の立場であり、『末法灯明記』は相即の論理による無戒の立場をとる。外面は似ているが、内面は似て非なるものであろう。視点が異なるのである。

『末法灯明記』は、当時かなり読まれたらしいが、親鸞が主著『教行信証』でとりあげたので、さらに有名になったようにも考えられる。ちょうど、『平家物語』の作者が『徒然草』でとりあげられたので有名になったのと似ているようである。相即の論理は、現在においても圧倒的な姿を見せているように思えるが如何。

春夢女史の文と南子の歌 (二) 1990.9.10 原田憲雄

—「中野逍遥」補遺—

三、『逍遥遺稿』のなかの春夢

『遺稿』にみえる春夢関連の詩文は拙稿のあちらこちらに引くが、漢詩文はすべて読み下し文だけだった。ここにあらためて原文を、読み下しと共に掲げておく。ただ架蔵の『遺稿』初刊本は外編だけだから、正編の部分は岩波文庫初刊本によらざるをえなかった。

別春夢女史二首

春夢女史に別る 二首

(正編・明治二十五年)

南風惜帰客

南風 帰客を惜しみ、

鉄笛吹離思

鉄笛 離思を吹く。

牽衣約他日

衣を牽(ひ)いて 他日を約し、

揮淚憶前時

涙を揮(ふる)つて 前時を憶ふ。

翠眉纒含秋

翠眉 纒(わづか)に 秋を含み、

蒼鬢忽成糸

蒼鬢 忽ち 糸と成る。

風霜雖殊地

風霜 地を殊にすと雖(いへど)も、

莫乖百年知

乖(そむ)く莫(なか)れ 百年の知に。

孤感名月夜

孤感 名月の夜、

寒士倚天涯

寒士 天涯に倚（よ）る。

七月暑如此

七月 暑きこと かくの如し、

脚何不暫留

脚（けい） 何ぞ 暫くも留らざる。

拔釵畫前路

釵（かんざし）を抜いて 前路を畫すれば、

孤雲落日頭

孤雲 落日の頭（ほとり）。

落日不可招

落日 招くべからず、

佳人下玉樓

佳人 玉樓を下る。

青眼一片情

青眼 一片の情。

丹心千古愁

丹心 千古の愁ひ。

長亭復短亭

長亭 また 短亭、

望斷南紀州

望斷す 南紀州。

第二首から察すると、七月、休暇に入って逍遙が帰省しようとしたとき、春夢が、新宮に立ち寄るよう誘ったのを、逍遙は別の機会にといって断わり、この詩を贈って慰撫したのであろう。この年、逍遙は二十六歳、春夢は二十歳であった。逍遙が十九から二十歳ころにかけて書いたといわれる小説『慈涙余滴』にみえる少女が春夢ならば、知り合って七年を越えようとする。逍遙は二十二年には「本所に僑居（かりずまい）」（正編・本所僑

居中……) していた。春夢の祖父坪井玄益が二十四年一月に本所石原町で死んでいるので、春夢も、東京にいと
きは石原町で起居したのであろう。さきに想像したように、逍遙が春夢の漢学の教師に招かれていたとすれば、
「本所の僑居」が春夢のいた家であった可能性もないわけではなく、それなら二十四年夏、逍遙が「文科大学学
寮に在り」というのは、玄益の死にかかわっての転居かもしれぬ。二十五年十一月には逍遙は「浅草今戸街に僑
居」する。石原町と今戸は二キロしか離れず、明治の青年にとってはほんの隣であった。ふたりはなお互いに往
来していただろうか。十三、四歳の少女にとって二十前後の青年は師たるに十分で畏敬すべきだったろうが、二
十歳となった女性には二十六歳の成人は未婚であれば、恋人として、結婚の相手としての範囲にちかづいてい
だろう。春夢にとってのこのときの逍遙は、そのような位置にいたのかもしれない。しかし逍遙にとっては、愛す
べきではあっても、親しすぎて、恋愛の対象とは考えにくかったのではないか。げんにこのとき、かれは南条貞
子を狂おしいまでに恋慕していた。外編の「狂残銷魂録」は、

明治二十五年壬辰十一月、予南の寒生狂骨子、疴(やまい)を負うて浅草今戸街に僑居す。残月子なる者あ
り。神田に宅す。…秋雨軒をうつ夕べ、月明鷹を照らす夜、一室に会し文を談ず。…傍らに評語もて談を助
くる夫人あり、微笑して談を聞く淑女あり。

と序にいい、連作長編が続く。「狂骨子」は逍遙で、「残月子」は佐々木信綱を指す。内容はすべて逍遙の南条
貞子に対する恋情と、信綱の「磯馴松」と仮称する愛人への思慕である。だがそのなかに、

少稚曾分秋月襟

少稚(をさなきとき)

かつて分かつ

秋月の襟、

龍膽花摧予州丘

龍膽 花は摧(くだ)けたり 予州の丘。

今年又割春夢袂

今年 また割(さ)く 春夢の袂、

楊柳糸断紀海舟

楊柳 糸は断(た)ゆ 紀海の舟。

(狂殘痴詩 其八)

というのは、逍遙が「龍膽」とよぶ郷里の幼馴染みと同じように、春夢にも一種の愛情はもっても恋ではないことを表白したもので、「壬辰十二月三日」の日付をもつ狂殘痴詩十篇の後書きに「美の感、愛の情、鍾(あつめ)て南枝の一点にあり」というのは、その恋愛の対象が南条貞子であり、それ以外にはないことを、みずからにも宣言したものであろう。

遊紀州、投坪井氏、

紀州に遊び、坪井氏に投じ、

訪徐福墓、觀那智

徐福の墓を訪い、那智の瀑(たぎ)

瀑、共春夢子焉、

を觀る。春夢子と共にす。

將発、賦贈坪井氏、

まさに発せんとして、賦して坪井氏に贈る。

坪井氏名蜂音庵 産本

坪井氏名は蜂音庵(ぶん)産本には

作蜂音庵 業

蜂音庵とす誤りなり 業を業とす

(正編・二十六年八、九月の間)

熊野之勝吾嘗聞

熊野の勝は 吾れ 嘗て聞く、

那智之瀑今始觀

那智の瀑は 今 始めて觀る。

天将秀麗鍾紀州

天は秀麗をもつて紀州に鍾(あつ)め、

地当南海開仙寰

地は南海に當つて仙寰（せんくわん）を開く。

秦時使節徐福氏

秦時の使節 徐福氏、

千里求秦向此地

千里 秦を求めて、この地に向ふ。

蓬萊未必在天上

蓬萊 未だ必ずしも天上に在らず、

一葦棹水舟可至

一葦 水に棹さして 舟 至るべし。

扶桑水清山亦洲

扶桑 水は清し 山また洲、

堪向外夷誇景致

外夷に向つて 景致を誇るに堪ふ。

吾仗孤劍入東都

吾れ 孤劍によつて 東都に入り、

文学研志十兎烏

文学に志を研くこと 十兎烏。

狂才傲世節尚高

狂才 世に傲つて 節なほ高く、

瘦骨凌天秋欲枯

瘦骨 天を凌いで 秋 枯れんとす。

南紀風光過我眼

南紀の風光 我が眼を過ぎ、

筆端忽覺文章綯

筆端 忽ち覺ゆ 文章の綯。

況有傾蓋許至親

況んや 傾蓋 至親に許し、

一片情出于方寸

一片の情の方寸より出づるあるをや。

腰下劍脱可贈君

腰下の劍 脱して 君に贈るべく、

東望旅程欲銷魂

東のかた旅程を望めば 銷魂せんとす。

離愁漠漠説不尽

離愁 漠漠 説き尽さず、

孤鶴唳入海天雲

孤鶴 唳(な) いて入る 海天の雲。

この訪問の目的が前年の約束を果たすためだったことは明らかだ。誘った春夢の愛に応えるものだったかどうかはこれだけでは判断に苦しむけれども、「狂殘痴詩」などの諸作に照らせば、他の女性、すなわち南条貞子、を恋し、結婚の相手として決めていることを告白し、坪井すむとは兄と妹のような友情において今後も付きあいたい、といった意向を、蜂音庵と春夢に述べて、諒恕を求めたのではないだろうか。「至親に許す」とはそのような事情を含蓄するのであろう。さきに引いた「狂殘痴詩」八の末に近く、

予国龍膽紀州柳

予国の龍膽 紀州の柳

併將感慨付飛鴻

併せて感慨をもつて 飛鴻に付せん

というのは、南条貞子への感情を、宇和島の幼な馴染みにも紀州の春夢にも告げよう、といっているのである。

「飛鴻に付せん」とは、はじめは手紙でするつもりであったことを物語り、それは相手に対してむごく感ぜられ、

直かに会って話そうと考えるおしたのであろう。内篇の「明治廿六年八月帰郷中」に、

江湖為客十葛裘

江湖に客となつて 十葛裘、

万里壯心一葉舟

万里の壯心 一葉の舟。

人生誤解銷魂種

人生 誤つて 銷魂の種を解(ひら)けば、

到处山河渾関愁

到处処の山河 渾(すべ)て愁ひに関(とざ)さる。

春夢繫思南紀柳

春夢 思ひは繫ぐ 南紀の柳、

秋琴馳涙東武州

秋琴 涙を馳す 東武州。

吐鳳彩筆未干關

吐鳳の彩筆 未だ關に干(もと)めず、

驅馬東西列何侯

馬を東西に驅(は)せて いずれの侯にか列せん。

百里豈是大賢路

百里 あにこれ大賢の路ならんや、

此身恥与燕雀儔

この身 燕雀と儔(たぐひ)するを恥づ。

海天蒼茫望無極

海天 蒼茫 望めども極まりなく、

月高江城十二樓

月は高し 江城の十二樓。

というのは、帰郷して、かれが「龍膽」とよぶ幼馴染みの、あるいは婚約者であったひとに告白し、破談となり、忽ち郷里の親戚知友から非難が集中する状況で歌われたのだろう。大学をまだ卒業もしていないのに…、就職その他の前路も決っていないのに…、温純な婚約者に背いて他の女にうつつを抜かすとは…、非難の内容はおおむねこのようで、詩の後半は非難に対する反発であり、批判する郷党を燕雀のたぐいと反批判しているのである。

とはいっても、かれの身勝手は自身がもっともよく知り、次いで相似た許しを乞わねばならぬ春夢のことが気懸かりで、それが「春夢思ひを繫ぐ」の句となり、さまざまの煩累をかなぐり捨てていっても、かんじんの南条貞子の親族が、かれの望みを聞き入れるかどうかはまったく未定であった当時の状況を「秋琴涙を馳す」と嘆い

ているのだ。

春夢と逍遙の間には婚約はなかったであろう。迎える蜂音庵は、逍遙を娘の「師」として待遇したことだろう、春夢のそぶりから察してある程度の期待はかけたにしても。その師が、やがて卒業を待って他の女性と結婚すると告げるとき、心を傷めはしても、おもてには祝意を述べて送り出すほかないのが、娘の父の、「師」に対する態度であろう。蜂音庵はそれを男らしく果たし、逍遙はうたれて、父から与えられた剣を贈ったのだ。

紀州なる春夢子のもとにつかわしける

(外編・二十六年秋)

みくま野のうらの浦波よるよるにすむらん月の影をしぞ思ふ

松かせのわたる垣ねに駒とめてきかまほしきは君かつま琴

もろともにわけし夏野のむら薄うらかれて行頃とはなりぬ

打寄する熊野の浦のうら浪にいほもあれて秋さひぬ覽

共にみし那智のしら滝秋の雨に水もまさりていはやくす覽

打なひく君が垣根の薄生にいたくなふきそ木枯の風

九月には東上するのが例の春夢が、その年はたぶん十月になっても姿を見せず、原因がおのれによると案じて、この和歌を新宮にあてたものか。

偶 感 又の又

(外編・二十七年か)

千篇詩就李長吉 千篇 詩は就(な)る 李長吉、

嘔血夜来似杜鵑

血を嘔（は）いて 夜来 杜鵑（ほととぎす）に似たり。

春夢凄凉紀州月

春夢 凄凉 紀州の月、

秋琴寂寞武城烟

秋琴 寂寞 武城の烟。

天驅英雋投窮厄

天 英雋を駆つて 窮厄に投じ、

世妬良縁劃秀妍

世 良縁を妬んで 秀妍を劃（わか）つ。

宝劍斬姦用無処

宝劍もて姦を斬らんとすれども 用うるに処なく、

匣中共泣廿余年

匣中 共に泣く 廿余年。

これは二十七年三月、南条貞子が弁護士と結婚した後の作で、「秋琴」が貞子をさすことはあきらかだが、春夢の名を共に出しているのは、女史のほうから逍遙にそむいたようにもとれなくはない。しかしそうではなく、春夢は、貞子への恋愛を告白された後は、傷心によって、かれへの文通も面会もするに堪えなかったのであろう。『遺稿』の逍遙の最後の作品は、次の和歌である。

思人切（ひとをおもうてせつなし）

（外篇・二十七年秋か）

逢坂のせきは八千重に雲深みおもふ思ひによわる玉の緒

春の夜のゆめときえにし花ゆゑにやせし胡蝶や我身なるらむ

春夢への愛を、みずから「友情」と限定し、ひとにも伝えておきながら、いつかそれが恋にかわって燃え上がろうとしていることの、しるしではなからうか。

おのずから

1930 9 25

原 田 慶

おのずから よこしまに降る 雨はあらし

風こそ 夜半(よわ)の 窓をうつらめ

日蓮聖人御詠

今年の秋の彼岸会は、台風十九号の通り過ぎた後の晴れた日だった。日蓮聖人のお歌に、福家辰巳氏作曲の聖歌を、お参りの人とみんなで歌うことにして、娘の伴奏で練習していた。

彼岸が近づいた頃、第二室戸台風と同じくらい強さだという十九号接近の予報があった。ずいぶん長らく、大きな風を経験してないので、恐ろしさを忘れていたが、十九日の夜には、風が強くなってきた。だんだん音がひどくなり、○時を過ぎる頃には、ガラス戸が吹き飛ばされるのではないかと思うほどの風が北から西へ廻り、ビュービューと唸りをあげて雨をたたきつけてきた。とても眠ることなどできずカーテンの隙間から、外ばかり見ていた。戸にさわってみると中へ向かって押しつけられているのがよくわかる。少し弱くなったかと思うとまた強くなる。横になったり起き上がったりを繰り返していたが、いつの間にか眠ったらしくて、ふと気がついたら、外は白く明け初め、風はおさまっていた。

急いで起きて、部屋の外の中庭をガラス越しにのぞいてみると、変わった様子はない。近くの家々の屋根もいつもと同じ顔をしている。あんなにきつい風がうそみたいだと思いつながら、台所のほうへ行って西側の墓地に向

かう窓のカーテンを開けると、いつもと景色がちがう。見ると、窓の外に緑陰をつくって高々と伸びていたクルミの木が、「法華一乗の宝塔」の上におおいかぶさるように倒れていた。

彼岸会まであと三日しかないのにこれは大変なことになった、どうして起こしてやればよいだろうかと思いつながら呆然と立っていた。倒れてみれば、墓地いっばいに枝が広がり、立っていたときより一層大きく感じられる。主人に、クルミの木が倒れましたと告げると、それほど驚いた様子はなく、「そうか」と言っていて着替えをして出てきた。暫く見ていたが、「かたづけんと仕方がないな、ちょっと電話してくる」といって書斎へ引き返していった。早朝にお参りに行くはずの檀家へ断りの電話だったらしい。

朝のお勤めをすまし、朝食を終わって、さっそくかたづけに取りかかった。

塀の外へ廻ってみたが、外には一枚の落葉もなかった。クルミは「法華一乗の宝塔」に支えられて、木のさきが塀際で止まっている。木の下をくぐって調べてみると、塔の石も、欠けたり傷ついたりしている所はどこにもない。頂上の宝珠の形をした石が落ちていたが、それも損傷はなかった。木はまず北寄りに倒れてそこにあったポポーの木をクッションにし、老木だったポポーが持ちこたえられずに南へ倒れたので、そこにあった枇杷の木にもたれ掛かった。そうしてそれと共に倒れたので、三本の木が力を合わせて衝撃をやわらげ、墓の塔は木の下でみごとに無傷であった。

ブロック塀に囲まれていて、クレーン車を入れることなどできないし、ほかに思いつく適当な方法もないので、切ってしまうより仕方がない。主人と娘が鋸を使って、細い枝から順に切り落としてゆく。榎原に住む長男を応

援に頼んだらと言ってみただけ、あれには勤めもあることだからそんなにしなくてもいいという。とにかく三人で力を合わせて懸命に働いた。わたしは切り離された枝を一輪車に積んで、境内東の端の来客用ガレージにある焼却炉の傍まで運ぶ。緑色の皮をつけたままのクルミの実がいっぱいについている。毎年、たくさんの実を落しにくれたのに、これが最後のクルミだなと思う。

日が暮れるころには、葉を切り取られて裸になった太い幹だけが残った。仕事をしながらわたしたちは何度も、なんと賢いクルミだろう、墓に傷つけず、建物を壊わさず、落葉を外へ出さず、塀を破らず、どうしてこんなにじょうずに倒れることができたのだろうと感心した。

最近、この木が大きくなりすぎたと考えて、次に植木屋さんに来てもらったときにはもっと切り縮めてもらわなくてはと思っていた。イラガの幼虫や、シロヒトリの毛虫が群がるので、それを防ぐために、重い葉の噴霧器をかついで主人が屋根に上がるのを見ているのがつらかった。そういうわたしの思いを、クルミは知っていたのかもしれない。そう考えると、わたしは気が咎めて仕方がなかった。どんなものに対しても、疎外の心を持つものではないなと思う。

翌日は太い枝や幹ばかり切る仕事なので、わたしと娘は東の庭の掃除をすることにした。彼岸会が近づいているから、仕事を手分けするほかない。ほんとうはもっとゆっくりと、クルミの最後を見とってやりたかった。庭では、桐の葉などもほとんどひきちぎられて、低い木の上や草の上に貼りついている。ガラス戸は吹きつけた雨と泥に汚れている。わたしと娘は、それらの掃除をし、本堂の飾りつけをしていたが、その間に、クルミの木は

六十センチ余りの長さの丸太に切り刻まれていった。以前、妙見堂のまえの楠を切り縮めなければならなくなった時の寂しがりようを思うと、黙って切り続ける主人の気持が察しられ、ことさらに知らん振りをしていたら、外を通りかかった人が声を掛けた。

「大きな木が倒れたんですね。何の木やったんですか」

「クルミです」

「青い実がたくさんなっていましたけど、クルミやったんですか。何やろと思ってました。もったいないですね」
「ええ、もう二十年以上になります。ほんの小さな苗木を植えたんですけどね。とても実がなるとは、思わなかったが、大きくなりましたよ」

見知らぬ人の惜しんでくれるのが、主人を慰めているようだ。

わたしも出ていって、切るのを手伝ってみた。生きている木は、鋸に吸い付くようで、引くのおそろしく力がある。そんなにして引いても、切れているのか滑っているのかわからない。細いところは二十センチほどの直径で、なんとか一本切り落とす。根本のほうは三十センチ以上もあり、十センチほど切り込むのがやっとだった。子どもの頃には、枯木を切って、薪作りをしていたので、鋸やまさかりを使うのはなんでもないと思っていたが、とんでもないことだった。夜には腕や背中が痛かった。

三日かかって、やっと、根本から七十センチくらいを残して、幹を切り終った。太い丸太が、十本以上できていた。根は東側半分が土から起き上がり、反対側の半分は土の中に残っている。残った幹は押ししても引いても動

かない。

「起こすことはとても無理だ。びくともしない。このまま、土を寄せておくことにしよう」

「残しておいたら、切り株の赤ちゃんが生まれるかもしれません。森の動物たちが、大きな切り株に、枯れ草を運んできて掛けてやったら、春になって、株の傍から新しい芽が出てきたというお話があるんですよ」

「そうなるかどうか、確かなことはわからん。かわいそうやと思うけど、こうしておくより他に方法がない」
クルミの根は前に爪先立ちしたような姿のまま残されることになった。

彼岸の法要もすんで、部屋に座って窓から外を見上げると、あたりまえのようにそこにあったクルミの枝がない。鳩、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロなど季節の鳥がきて渡り歩く姿に見とれた。白く光りながら毛虫が這い下りてきたいやな季節もあった。もう実をつけなくてもいい、みどりの葉がひらひらとそよいでくれたらそれでいい、どうか切り株の周りに小さな芽が出てきますように。

おのずからよこしまに降る雨はあらし

「これは、日蓮聖人がいつ詠まれたのか、確かなことはわかりませんが、はげしい雨が窓をうって、貧しい庵室を濡らし、聖人を濡らした夜のことです。だれもが信じようともしない法華経を伝えようとするわたしをなぜ雨までがうとうとするのか、と思ひ、いや、雨がみずからの意思で横しまに降ろうとするのではない。まっすぐに降る雨に、風の力が加わったのだ。風もまた他の力とともにここに吹きつけることになったので、物事は、さまざまの因と縁によって起こり、因と縁が消滅すれば物事も消滅するという、縁起の教え、み仏の根本の教えを、

わたしにより深く考えさせようとして、夜の庵室の窓をうってくれているのだろう、と思いかえされた感動から生れたお歌でしよう」

と説明されるのを聞きながら、大きくうなづいている人があった。その人には、何か悩み事があって、その原因らしいものに気づきながら、それだけでやってくる悩みとしてはむごすぎると感じていたのを、一つのことだけでなく様々のことが加わった結果であって、一つのものだけを責めてはいけないと聞き取り、同感されたのであろうか。わたしの勝手な想像だったかもしれないが。

風こそ夜半の窓をうつらめ

美しいメロディがついていて、ここで歌うのは初めてだったけれど、みんなの声はよく響いた。練習もふくめて六回くらい繰り返し返して歌った。わたしはクルミのことを思いながら心をこめて歌った。

仏の智慧

—法華経巡礼 52—

1990.10.2 原田憲雄

3.32 巧みな方便によって、わたしは、三つの乗り物をかれらに説く。

三界に多くの欠点があるのを知り、それを洗いおとすために方便を説くのだ。(89)

息子たちのあるものはわたしを信頼し、六神通・三明の大きな威力をそなえ、

あるものはここで独覚となり、あるものはここで不退のボサツとなる。(90)

これら平等の息子たちに対し、そのとき、このすぐれた譬喩によって、賢者よ、わたしは説く、ただ一つの仏乗を。受持せよ、きみたちはすべてジナとなるだろう。(91)

それは、すべての世界において、もっとも広大で、魅力に満ち、最勝のもの、
両足のものの最高者なる仏の智慧、気高く、尊敬すべきもの。(92)

upāya-kausalyam aham prayojayī yānāni trīṇi pravadamī caisam /

janatva ca traidhatuki neka-dosān nirbhāvanārtthaya vadāmy upāyam //89//

mām caiva ye nisṛita bhonti putrah sad-abhijñā-traividya-mahā-nubhāvāh /

pratyekabuddhās ca bhavanti ye 'tra avivartikā ye c'iha bodhisattvāḥ //90//

samāna putrāṇa hu teṣa tat kṣaṇam imena dṛṣṭānta-varaṇa paṇḍita /

vadāmi ekam imu buddha-yānam parigrhathā sarvi jina bhavisyatha //91//

tac cā varistham sumanoramam ca viśiṣṭa-rupam c'iha sarva-loke /

buddhāna jñānam dvi-padottamanam udāra-rūpam tatha vandaniyam //92//

※前号正誤 九頁六行 「歌人・大塚五朗(一〇)」に、山村湖四郎先生につき「その間に、一九四二年から京都府立嵯峨野高等女学校教諭として、引き続き五郎の同僚だった時期があるはずである。」と記したが、先生は嵯峨野高女に勤務されたことはなく、京三中から京都府立京都第二高等女学校に転勤されたのであることを、先生の令息山村泰彦氏恵投の湖四郎先生創刊歌誌『朝霧』などで知った。お詫びして訂正し、かつ感謝します。